

史跡米子城跡の発掘調査成果

- 月山富田城から米子城へ -

鳥取県米子市教育委員会
濱野 浩美

1. はじめに

鳥取県米子市の中心市街地、中海に張り出した湊山(標高 90.1m)を中心に築かれた米子城は、山頂に五重の天守郭と四重の副天守郭(四重櫓)を持つ壮麗な城であったという(写真1・2)。現在も天守台からは大山、日本海、島根半島、隠岐、中海が一望できる360度のパノラマが広がる。廃城後、建物は失われたが縄張りに大きな改変はなく、石垣、縄張り等に往時の姿をよくとどめている。

2. 米子城の概要

近世城郭としての米子城は、天正19(1591)年、西伯耆、出雲など12万石の領主となった吉川広家が海の活用を考え、中海に張り出した米子湊山に築城を開始したことに始まる。慶長5(1600)年の関ヶ原の戦後、吉川広家は岩国に転封となり、伯耆国領主(18万石)として駿河国から転入した中村一忠により、慶長7(1602)年頃米子城は完成されたと言われている。その後、慶長14(1609)年からは加藤貞泰(伯耆国会見・汗入郡6万石)が入り、元和3(1617)年、加藤氏が伊予大洲に転封された後、一国一城令後も鳥取藩池田家の支城として廃城を免れ、明治時代まで鳥取藩の首席城代家老荒尾氏が主として城を預かった。

この米子城の最大の特徴は、山城ともいうべき山上の城郭部分と、御殿を有する山麓の二の丸、三の丸部分に大きく分けられることにある。山上部は湊山山頂の本丸を中心として、東側の飯山山頂に采女丸、北側の丸山山頂に内膳丸の二つの出丸を配する。これを中海の水を引き込んだ二重の堀(内堀・外堀)が囲む。内堀と外堀の間には武家屋敷地を配し、外堀外側に町屋・寺町を配した同心円構造の惣構で、水域には北に商港としての米子湊、南に軍港としての深浦湊を配し、南麓の深浦郭(御船手郭)には水軍を配する(第1図)。いわゆる、中海に張り出した立地を生かした総構による防御と交通の利便性を備えた縄張りで、平成18(2006)年、国史跡に指定されている。

3. 近年の発掘調査(第2図)

米子市教育委員会では、史跡米子城跡保存整備事業の一環として、平成27(2015)年度から、史跡内の内容確認調査を進めている。

平成27年度：深浦(天守南)側の二か所での郭の確認

- ・八幡台郭：天守南東側において野面積の石垣の郭を確認

上面は幕末嘉永年間の四重櫓補修時の作業場(『鹿島家文書』記載)として使用(記年銘瓦の出土)。

- ・水手御門下郭：天守南西側に石垣が巡る二段の郭を確認。

月山富田城側(南西)を向く。石垣上部は破城の跡か？

平成28年度：登り石垣の確認

- ・本丸遠見櫓から内膳丸に繋がる登り石垣(北西側)を確認。

既存の米子城絵図に描かれ、研究者により指摘されていた登り石垣が、内膳丸の御門から遠見櫓北東隅部にかけて確認された。(第3・4図)。

発掘調査では、一部試掘トレンチを設け、登り石垣の構造の解明を行った。地山面である基盤岩まで掘り下げて調査を行った結果、主郭のある湊山と内膳丸のある丸山を結ぶ尾根の稜線を利用し、西側(中海側)の岩盤をL字状に削平し、中海側にのみ石を積んでいることが判明した。その構造を見ると、湊山の尾根稜線の地形をうまく利用し、高低差をつけて防御性を高めると同時に、非常に効率的に登り石垣を築造していることがよくわかる。

面上からは大量の瓦が出土していることから、石垣上には瓦葺きの土塀が構築されていた可能性が考えられる。

- ・御門の調査

現況で、登り石垣には内膳丸側との間に幅6.0mほどの平坦面がある。絵図ではここに御門が描かれている。遠見櫓から延びる登り石垣は、ここで途切れて屈曲し、長さ6.0mほどの尾根に直交する石垣が築かれている。この石垣は位置的に見て、御門の左右に築かれた石垣と考えられる。この部分の形状から、登り石垣の築石よりは新しい時期に構築された石垣と考えられる。さらに、試掘トレンチ調査の結果、整地面上に門柱の礎石や控え柱の礎石穴を確認することができた。検出された礎石は、位置的に見て御門の脇小門の礎石と考えられる。さらに、古い礎石の一つが、御門に伴う石垣の下から検出された。この礎石の検出により、御門が築かれる以前に、登り石垣の背面にあたる平坦面上に櫓などの建物が存在していたことが判明した。

以上のことから、御門は、登り石垣を一部改変して取り付けられた門であることがわかった。すなわち、築城当初の段階ではここに門はなく、登り石垣は内膳丸先端まで延びる長大な石垣で海側を遮断し、石垣背面の鞍部を削平した平坦面には監視のための櫓などの建物が構築されていたことが推測できる。御門はその後、内膳丸を郭として改変した段階で、鈴門側に降りる利便性のために取り付けられたものと推測される。

平成29年度：堅堀の確認

二の丸枳形から本丸番所跡方向に延びる堅堀(北東側)を確認した。枳形虎口が付設する二の丸高石垣の東端は虎口で屈曲し、南北方向に築かれて、南端は切岸に繋がる。この切岸は城内路に並行して南方に(深浦側)に直線的に43m伸びたところで130度、鈍角気味に屈曲している。今回、確認された堅堀は、この屈曲部分から構築され、等高線に直交して直線的に本丸番所付近まで構築されている。堀の全長は63m、深さは北壁側が約6m、南壁側で1mを測り、北側は急崖を呈している。番所付近では、堀の北壁は切岸状となり90度屈曲して、本丸を巡る石垣下の急崖に繋がる。この北端部分では堀底は広がり、切岸に囲まれた空間となっている。

調査では、堅堀を横断する試掘トレンチを3か所設け、その構造の解明を行った。その結果、北側の堀壁は地山をL字状に削り出している。これに対し、南壁はほぼ盛土による土塁で構築されていることが分かった。盛土の大半は基盤岩ブロックであることから、北側の切岸を構築する際に生じた土を、南側に盛って土塁を構築したものと考えられる。土層断面の観察によると盛土は、後世に斜面崩壊を起こした状況を呈していることから、本来的には、ある程度の高さがあったものと考えられる。以上のことから、この堅堀は北側の切岸と南側の土塁で構築されていることが判明した。

出土遺物の大半は、本丸からの転落遺物である。このうち、特筆すべきは、本丸側の堅堀端

部から出土した軒平瓦である（第5図）。この瓦の文様は小槌の左右に宝珠を配した中心飾りの左右に唐草文が配される。これは月山富田城、岡山城と同タイプの文様であり、過去に飯山（采女丸）では採集されていたが、本丸のある湊山においては今回が初めての出土である。

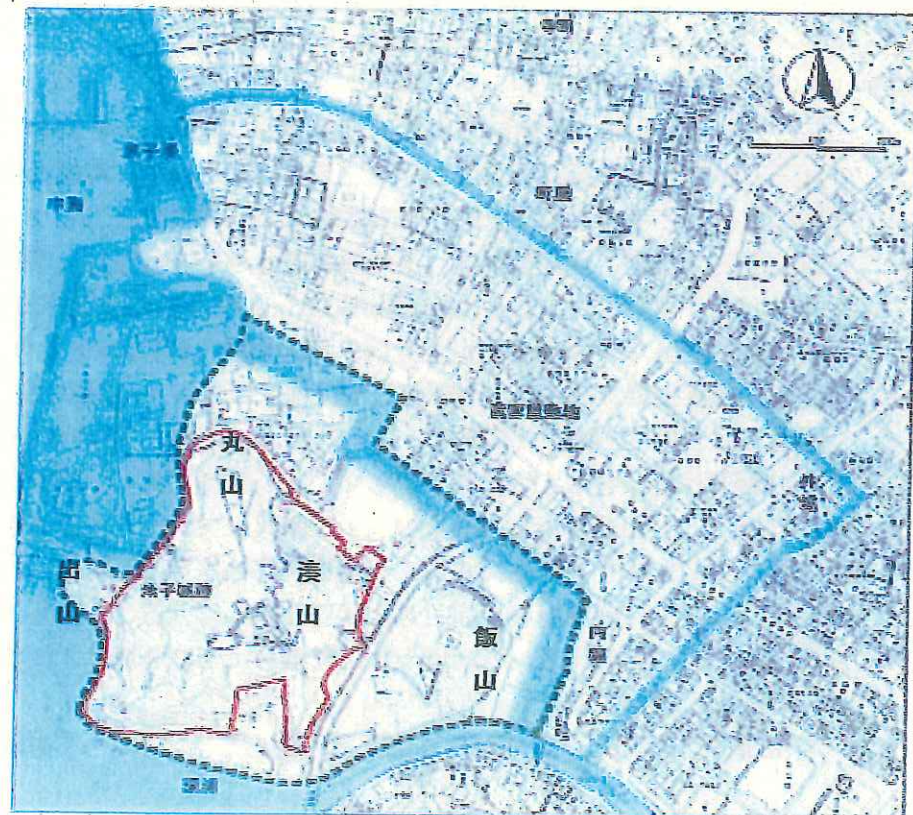
まとめ

平成27年度から進めている確認調査の結果、築城初期の米子城の姿が臚気ながら見えてきた。米子城の縄張りは山頂部の本丸を中心にして、北側の内膳丸、東側の飯山には采女丸を配していたことは周知されていたが、本丸南西の水手門下郭、南東の八幡台郭が新たに確認されたことにより、築城初期の段階で、中海側の防御を重視していたことが推測できる。また、北西側に遠見櫓から内膳丸にかけて登り石垣を設け、北東側に本丸番所跡から北東麓の二の丸枡形にかけて堅堀を設け、本丸から麓にかけて延びる2つの防衛ラインにより、御殿の所在する湊山北麓の二の丸を防御している。さらに、登り石垣は内膳丸から水手御門下郭まで一体化した防衛ライン、堅堀は麓の二の丸高石垣と一体化した防衛ラインを築いており、湊山の地形を巧みに利用して効率的に防御性の高い縄張りを構築していることが推察できる。

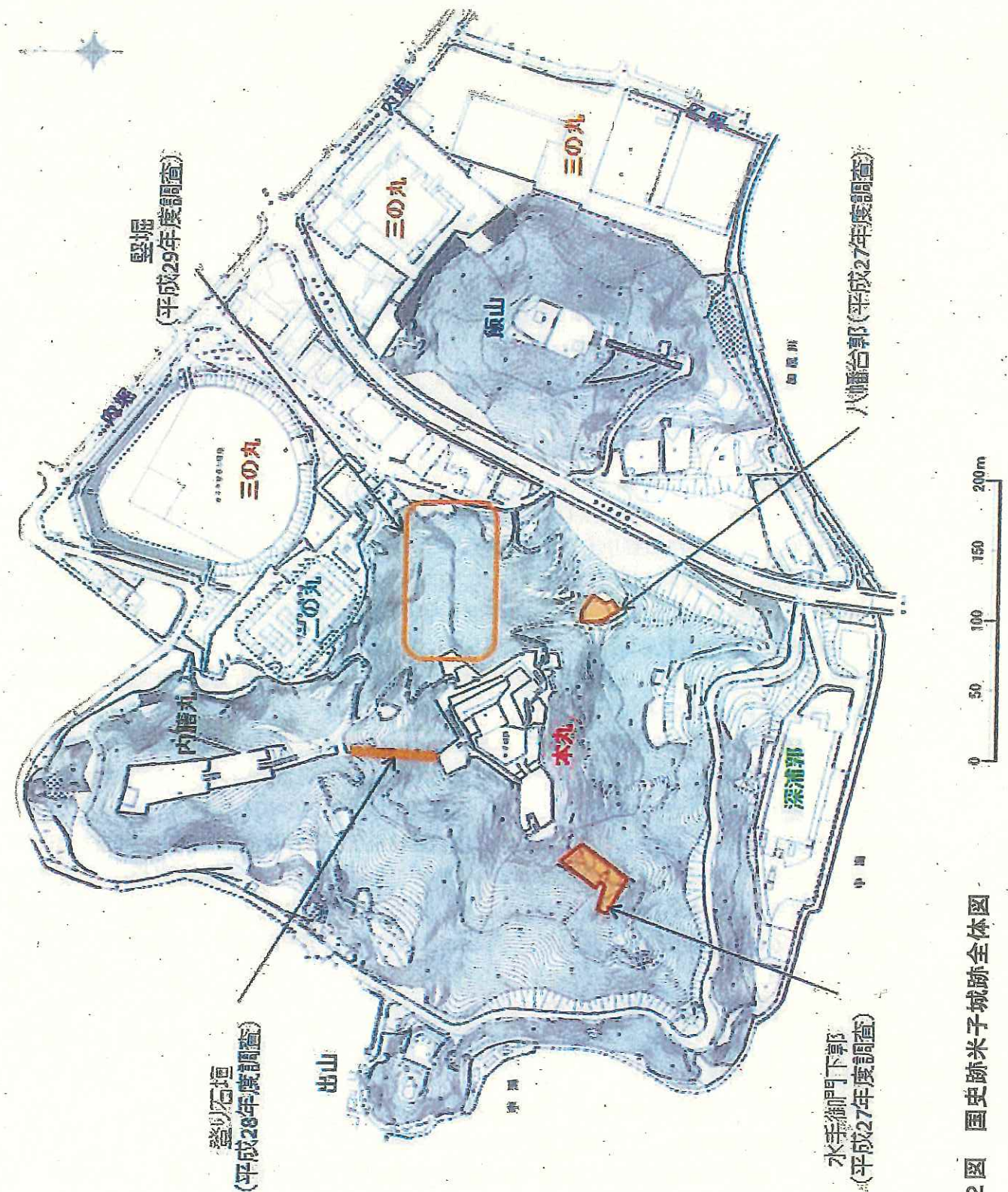
また、堅堀から出土した宝珠小槌文の軒平瓦は、備前岡山城や月山富田城で出土しているタイプであり、吉川広家期のもと考えられている（乗岡2015、加藤2017）このことから、吉川広家の段階で、湊山山頂に瓦葺建物が存在していたことが推測できる。これは築城初期の米子城に姿を考える上で非常に重要な資料であるとともに、山陰、山陽の城をつなぐ遺物としても重要な意味を持つものである。

〈引用・参考文献〉

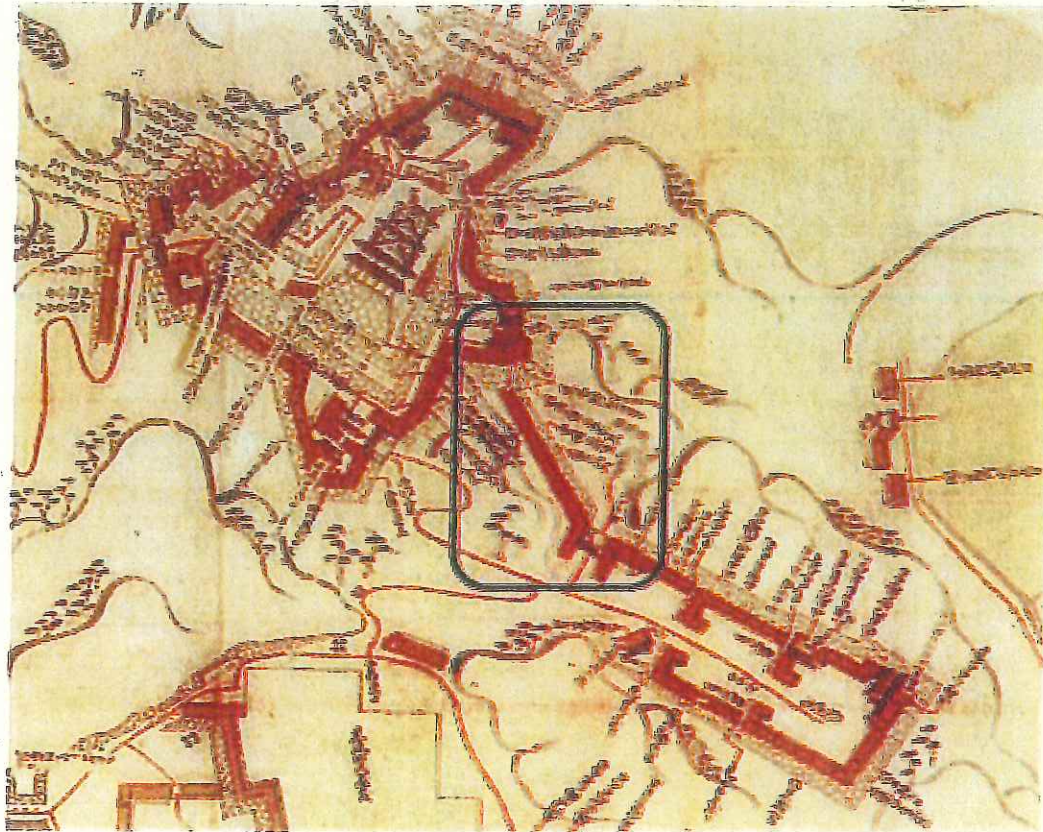
- ・米子市 1997 『新修米子市史』第12巻 資料編 絵図・地図
- ・米子市立山陰歴史館 1990 『米子城絵図面』
- ・乗岡 実 2015 「松江城の屋根瓦 - 山陰で活躍した瓦工と城郭整備 - 」『松江市歴史草書』8 松江市
- ・加藤理文 2017 「豊臣大名がやってきた!〜大きく変わる城の姿〜」『石垣で魅せる山陰三城跡シンポジウム』米子市
- ・鳥取県米子市教育委員会 2017 『史跡米子城跡保存活用計画書』



第1図 米子城下町地図 (水域は江戸時代中期頃の推定)



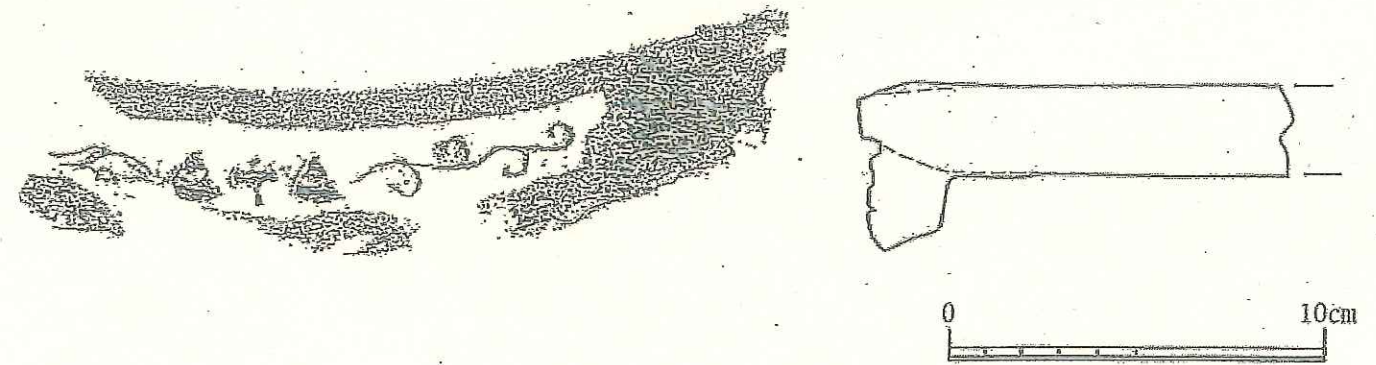
第2図 国史跡米子城跡全体図



第3図 『米子御城明細図』(元文4.(1739)年部分・鳥取県立博物館蔵)



第4図 登り石垣位置図・俯瞰写真



第5図 豎堀出土軒平瓦

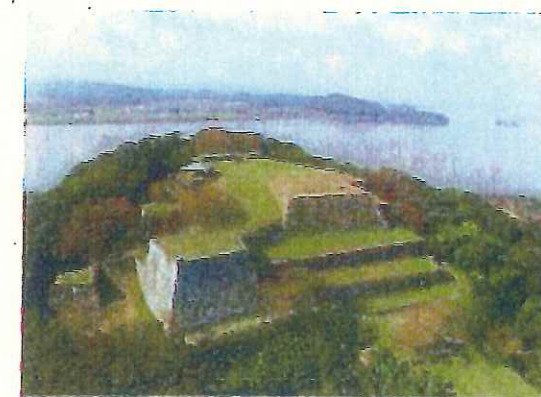


写真1 北東側上空から見る米子城跡本丸



写真2 番所跡から見る米子城跡本丸



写真3 八幡台郭で検出された石垣



写真4 水手御門下郭



写真5 登り石垣



写真6 豎堀